

「きぼうのいえ」ができるまで

――山谷でホスピスをと考えたとき、難しいかもしれないとは思っていませんでしたか？

みなさんに驚かれましたけれど、私の中では自然でした。一言で言えば、「だって、かわいそうじゃないか」というところに心が触れてしまったのかもしれない。

マザー・テレサだって採算の見込みを立ててから活動を始めたわけではないでしょう。「きぼうのいえ」も、世間のシステムから見れば無謀な試みだったかもしれない



●やまもと・まさき

1963年東京生まれ。1995年、上智大学神学部を卒業後、「NPO法人ファミリーハウス」の事務局長を務める。2002年4月、緊急一時保護施設「なかよしハウス」、同年10月に在宅ホスピスケア対応型集合住宅「きぼうのいえ」を開設。



インタビュー ともに生きる 3

「きぼうのいえ」施設長 山本雅基氏

隣人の中にいる もう一人の自分と出会う

誰が必要だと感じてはいたが、事業計画や採算性、継続性などを考えると非現実的な話であることは明らかだった。やるべきだとは思いうけれど、できるはずがない――。

ところが、できるはずのないことをやってしまった男がいた。そして無謀にも、彼を支えた妻がいた。

東京都台東区、荒川区にまたがる通称「山谷」地区のホスピス「きぼうのいえ」施設長山本雅基氏。

「いつか山谷の町全体をホスピスの精神で満たしたい」と語る彼のまなざしは「隣人になる」ことを越え、
「もう一人の自分」を見つめていた。

せん。情熱のままに突っ走ったと言われればそれまでですが、私の中では決して突飛な話ではありませんでした。

――いつごろからこのような活動を考えていたのですか？

学生時代、国立がんセンターに

長期入院している子どもたちの学習支援ボランティアに参加したことが、最初のきっかけだったと思います。その後、付き添いのために高額の出費を強いられている子どもたちの親御さんの状況を知ってそれから十年間、親の宿泊施設支援活動にかかりました。

活動が軌道に乗ったところに体調を崩したこともあり、いったん退きながら自分の道を探して、山谷のホスピスにたどり着いたのです。

——難病の子どもたちの支援が、どうして山谷につながったのでしょうか。

自分はいったい何がやりたいのだろうと模索していた時期、ちょうど私自身がいろいろな活動の中で迷い、挫折して行き場を失っていました。だからかもしれない、希望を失い、見捨てられた人が光を見いだせる場所をつくりたい、と考えたのです。そのとき、ある人の言葉を思い出しました。

実は十代の終わりのころ、新橋で行き倒れ寸前のホームレスのおじさんを自宅に連れ帰ったことがあります。二週間ほど一緒に暮らしたのですが、あるとき彼は黙って消えてしまいました。しばらくして、そのおじさんが担ぎ込まれた病院から連絡があり面会に行ったところ、ソーシャルワーカーの方に言われたのです、「自分のところに連れてくるのではダメ。自分がホームレスの人に寄り添わなければ。あなたは駅のベンチで



食事は元気な人は食堂で、来られない人は個室で。
「今日の昼食は？」「オムライスだよ」

の貯金を元に銀行に掛け合ってくれました。すると、こんな無謀な計画に一億二千万円の融資をしてくれる銀行があったのです。

スタートは切ったものの、返済どころか利息だけで月に二十万円です。本部

会計の残金が三百七十円になって、さてどうしたものかと思っていたら「三百万円の寄付をいただきました！」。そういうことが続いて、何とかやってきました。

同じような活動の場で頑張っている方たちから「危機のときに必ず助けがくる」という話を聞いたことはありましたが、それは偶然だろうと思っていました。でも実際あるんですよ、「救いの手」が。自分の身の上に起きてみると、やっぱり神さまも応援してくれているのかなあ、と都合よく考えています。

学べなかったこと自体、人生の悲しみ

——「きぼうのいえ」での一日のスケジュールは？

朝、昼、夜の食事の時間以外、制約はありません。部屋は五畳弱が基本で、すべてが個室。テレビ、ビデオも部屋で観られます。冷蔵庫の中は自己責任で、お酒が入っている人もいます。ここは一般のホスピスと違って入居期間の制限はありません。ターミナルケアの場というより在宅型ホスピスケア対応施設、終の棲家です。みなさんそれぞれのちの期限を宣告されていますが、病状に影響がないかぎりお酒も煙草も、散歩に行くのもパチンコに行くのも自由です。

現在の入居者数は三十二人。スタッフは常勤職員が七人、非常勤が八人。それから、週に三回から月に一回という人も含めて二十五人ほどのボランティアの方々協力をお願いしています。

——「きぼうのいえ」では今まで何人の方を看取られたのですか？

二〇〇二年の開設以来、ここで亡くなった方は九十一人になりました。年間ではぼ十七、八人の方が亡くなりますが、遺骨を引き取りに親族の方がいらしたのは、そのうちの三分の一くらいでしょうか。

——亡くなってから親族の方がいらつしやるのですか？

入居者さんの中には相当波乱万丈な人生を送ってきた人もいて、親族の方々も大変な思いをさせられていたりする。生きている間は放って置かれても仕方がないなと思うケースもありますよ。私も、最初に「だって、かわいそう」というところが触れたと言いましたが、実際始めてみると、「何がかわいそうなんだ、ふざけるな」と言いたくなるようなことも結構あつて……。

薬飲みませんか、と言うと「製薬会社からいくらキックバックがあるんだ」。もらってないよと言つと、「俺の内臓売る気だろう」。そもそも入居者さんたちは、この施設は私が借金して造ったということも知らない人が大部分ですか

ら、「お金は行政から出してもらつて儲かっているんだらう」。

——入居者の方たちと向き合うのも結構大変ですね。

大変ですよ。ここのおじさんたちは元気ですから、言いたいことを言う。若い女性ボランティアが「横に座れ」と言われて「セクハラだ」と泣きついてきたこともあつたし、「女のほうがやさしくていいな」と言われたシスターが「私だって女なんですけどねえ」つて。ともかく人を怒らせることに關しては天才的なおじさんたちですから、あらゆる人の気持ちを逆撫でする。初めはぼくもいちいち反応していたから、パニック障害を起こしてしまいました。

——そんなおじさんたちとも理解し合うことはできたのですか？

これだから社会に受け容れられない、自業自得だ、と言つてしまふことは簡単です。でも生活歴をたどつてみると、そこには人を恨んだり、疑い深くなつたりしても仕方がないと思うような人生がありました。



ビデオライブラリー。貸し出しているので部屋で見ることができます。



玄関に掲げられた聖フランシスコの祈り。

山谷にいる高齢のおじさんたちの多くは、中学卒業後に東京に来て、労働者としてこつこつと働いてきた人たちです。仕事がないという人に聞いてみると、新聞社で活字拾いをやっていたという。活字を間違ひなく拾えれば昔はどこに行つても困ることはなかったけれど、今は何の役にも立ちません。日本の経済成長の土台を支えてきた人たちが、景気の波や機械化に翻弄され、ある時点から用なしになつて放り出されてしまった。山谷のおじさんたちは、本人の努力如何にかかわらず落ちこぼれるしかなかったのです。

愛情を受けた経験が少なければ、愛情の受け方も、愛情がほしいというサインの出し方もわかりません。相手から感謝されることをとおして自分のアイデンティティーを見つけようとするのではなく、自分は相手を潰すことができるくらい影響力をもっているという破壊的な方向性において、自分の存在を見いだそうとするのです。

やられるほうはかなわないですよ。でもそれをその人の責任と言えない現実があつて、人とかかわり方を学べなかったこと自体がこの人の人生の悲しみだったのではないかと気づいたとき、腹立たしい気持ちはなくなりました。

「山谷」が「我が家」になる

— おじさんたちの気持ちをほぐすことはできるのでしょうか？

気恥ずかしい言い方ですが、やはり愛情のシャワーを注ぐしかない。初めは「うるさいな」と言っていたおじさんの表情がふつと変わり、そこで一気に心がほぐれて、「今までこんなことしてもらったのは、一度もなかった」と泣き出す人もいます。ここで起きていることは毎日が聖書物語。究極の救いの力が働いて人間が劇的に変わる場面に、私たちはいつも立ち合わせてもらっています。

裏切られ続けてきたおじさんたちは「きぼうのいえ」で、本気で自分に寄り添ってくれる人がいるのかどうか、とことんまで試しているのかもしれない。スタッフもボランティアもどのように受け止め、どこまで寄り添えるか、私たちの人間力が試されているのだと思います。

— それはまさに、隣人になるということなのでしょう？

スタッフの人には、ここにいる人たちはあなたのもう一つの姿だと思って接してください、と言っています。

今、目の前にいる人の身に起こったことが同じように自分の身に起こっていたとしたら……親がいる私ではなく親がいない私、ご飯が食べられなくなった私、愛されなかった私、そう考えてみると、おじさんたちが関係のない他人ではなくなってくる。隣人というより、もう一人の自分なのです。

— 隣人として何かをしてあげる、ということを超えて……

そうですね、セルフイメージの広がりともいうのでしょうか。子どものころは自分の部屋の自分だけの空間がとても居心地よく感じました。でも結婚してみると、多くの部屋はないし、奥さんは四六時中多くの周りにいます。それなのに自由がないとは感じません。どうしてだろうと考えたとき、周りの人を自分とは別の存在として認識するのではなく、感性を通じて合わせることで垣根を越えられると気づいたのです。



公私共に最良のパートナー、美恵さん。「についていこうというより私が引きずっているかも。大変ではなく、とっても幸せ。毎日楽しいですよ」

以前は自分と他者を区別するのと自分を確立しようとしていました。でもボーダーレスになると「きぼうのいえ」全体が自分自身と重なって、入居者さんたちも私自身として受け入れられるようになりました。さらにイメージが広がれば山谷の町全体、それがだんだん宇宙全体になったとき、生をも死をも超えて神に出会うのかもしれない。この世に生きるということ、そのためのレッスンのかもしれないと思うようになりました。

— 山本さんのこれからの夢は？

山谷には「きぼうのいえ」に入れない人が三千五百人ほどいます。その人たちもどんな年をとっていく。そのために「きぼうのいえ」を建て続けることはできませんから、「きぼうのいえ」の考え方を伝えるヘルパーステーションをつくって、そこを拠点にヘルパーさんが活動できるようにすれば、と考えています。二年半前から始め、今三十人くらいのヘルパーさんが山谷で活動しています。いつか山谷全体が生き直す場所としてのホスピスになればいい。誰もが我が家にいるようなかたちで最期を迎えられる町、山谷が貧しい人のためのアミューズメントスペースになったらいいなと、それがいちばんの夢ですね。